HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	汪中と国史儒林伝稿 ： 清代揚州の文学の研究 序説
Author(s)	近藤, 光男
Citation	北海道大学人文科学論集, 3, 64-89
Issue Date	1964
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/34275
Type	departmental bulletin paper
File Information	3_PR64-89.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

汪中と国史儒林伝稿

―清代揚州の文学の研究　序説―

近藤光男

一

揚州は、もと禹貢九州の一つとして、いまの江蘇省安徽省の全域と、浙江・江西・福建各省の一部にも亘る広大な地域を指す名であったが、隋の煬帝が漢代に呉の都城であった江都県に江都宮を置き、ここを揚州の首邑と定めてから、揚州とはこの地の呼称となった。それは揚子江の下游、鎮江の対岸、北へ延びる大運河の西岸に位置する。中国南東部の米がことごとくこの大運河を動脈として北へ運ばれるので、揚州は唐代を通じて商業都市として繁栄し、とくに明以後は両淮塩運使がここに駐して、塩政の中心地となつた。清の順治元年（一三四四）、山海関を破った清軍は翌二年この地に迫り、史可法の奮戦も空しく、四月、州城の陥落に際してはまさに阿鼻叫喚のちまたと化したのであったが、乾隆も半ばに近い揚州は、その惨はもとより遠く忘れ去られて、画舫ゆきかい、文人墨客の杖を曳く、水のみやこ、詩のみやことして、繁華を極めた。当時における行政上の区劃をいえば、高郵・泰の二州と江都・甘泉・儀徴・興化・宝應の五県を領するものとして、揚州府が置かれていた。甘泉県はただ江都県から分設されたにすぎず、この江都が府治の所在、すなわちいわゆる揚州である。雅名としてしばしば廣陵をもって呼ばれるのは、漢のときこ

の地に廣陵郡が置かれたからであり、邗江また韓江をもって呼ばれるのは、春秋のとき呉が邗城をこの地に築き、溝を穿って江淮に疏通したのに因る。

儀徴の阮元[*1]の廣陵詩事（巻三）に高郵の賈田祖について記述した一条がある。

賈田祖、字は稽孫は、わが郡の経学の開祖である。同邑の李孝成惇王懐祖念孫と友人で、三人みなよく飲んだ。酒もたけなわになると古典の疑念の個所をとり出して論議するのがつねであった。当時、古典学にたずさわった人々、興化の任子田大椿・顧文子九苞、江都の汪容甫中、寶應の劉端臨台拱らは、互いに深い交友をつづけつつ、おのおのその学問をつくりあげた。そのころ、元和の惠氏・休寧の戴氏は、大いに古典学を大江以南の地に興したのであったが、江北にはこれら諸君子がその提唱をしたのである。[*2]

ここに言うほどに賈田祖なる人を揚州の学壇に大きく位置づけしてよいかどうかには、検討すべき点があるとしてもこれはまず乾隆中葉における揚州の学界の姿をうかがうに足るものといってよい。この間の事情を、いますこし詳しく展望しなおしてみよう。

阮元が「大いに古学を江以南に興せり」としてあげた休寧の戴震は、皖南の片田舎から出て都に上り、大宗伯の官にいた高郵の王安国の邸に寓して、その子の念孫に学業を授けた。それは乾隆二十一年（一七五六）。その翌二十二年に揚州に来て、転運使の盧見曾の署内で始めて惠棟に会い、盧見曾のために大戴禮を校刊し雅雨堂本を校定などしている。こうして数年を経た乾隆二十八年（一七六三）、戴震は再びみやこへ上った。一方、都でその学を受けた王念孫は戴氏が去った乾隆二十二年、十四歳で父の喪に遇ったため、柩を奉じて郷里の高郵に帰っていた。戴震の去ったあとの揚州では、賈田祖（一七一四―一七七七）・李惇（一七三四―一七八四）・汪中（一七四四―一七九四）・劉台拱（一七五一―一八〇五）らに、この王念孫（一七四四―一八三二）も加わって、ともに古典を講究し詩歌を唱和して〝江北の學〟を

築いていった。これがいわば揚州漢学の第一期であって、皖南の学問がこの地に流寓した休寧の戴氏によって植えつけられ、高郵の王氏によって培われた時期と、わたくしは考える。

賈田祖、李惇が相次いで世を去ったあとの揚州、すなわち乾隆五十年（一七八五）以後は、二堂とか、鍾焦黄李または江焦黄李などと併称される人々の時代となる。二堂とは焦里堂、名は循（一七六三―一八二〇）と、江鄭堂、名は藩（一七六一―一八三一）。鍾・焦・黄・李とは、鍾褒（一七六一―一八〇五）・焦循・黄承吉（一七七一―一八四二）・李鍾泗（一七七一―一八〇九）で、もし江焦黄李というときは、この鍾褒を江藩と入れかえたにすぎない。みな江都の人で、これらの呼称の存在が示すとおり、揚州の学問ないしは文化の、中心に位置すると、自他ともに許した人々である。しかし彼らにとってすでに先輩格に当る汪中が貧窮した読書人の家に生れたように、彼らもみなほとんど顕官の家柄には生れあわせなかった。仕官のうえにも失意を抱くことの多い人々で、その点、名門の生れである王念孫や阮元が、京官や地方の高官に歴任して、大がかりに学問を推進してゆくのとははなはだ異なるのであるが、むしろこの阮元などの庇護のもとに、学問そのものを生きがいとして、華やかな時代に苦しい生活を生きぬきつつ、それぞれに意義ある業績を残した。このことは第一期にあげた学者たちにも共通する。ところでこれをまた、かりに第二期とよぶならば、この時期には明らかに呉郡の恵氏の学問が流れこんでいる。それはまた、嘉定の銭氏の学という支流をもともなっているが、皖南の学（多く前期に流入）と呉郡の学（多くこの期に流入）とが、揚州漢学の二つの大きな形成要素であったとするのが、わたくしのもつ仮説である。これをもしそれぞれの学問が得意とする古典の名をもって色別けするならば、皖南の学は礼学であり、呉郡の学は易学である。そのこと自体、まだ論証を必要とすることであるが。[*3]

いまひとつ揚州の学問を育んだ要素として忘れられないものがある。はじめに述べたように文人墨客の杖を曳くこの景勝の地は、はなはだ流寓の詩人に富む。つとにかの揚州に名だたる蔵書楼、小玲瓏山館の主、馬曰琯（秋玉）・馬曰璐（佩兮）の兄弟を中心に邗江吟社が結ばれていて、厲鶚（樊榭）・杭世駿（董浦）・全祖望（謝山）らみなその家に寄

寓していた（蔵書紀事詩巻四）。そののちには袁枚（隨園）・蔣士銓（心餘）・趙翼（甌北）そして王昶（蘭泉）など、清朝中葉の詩壇に不朽の名を残す人々がこもごもこの地に集い、唱和の日々を送るうちに多くの詩人たちを養っていった。江焦黄李のうちの黄承吉ほどに、詩の名が高いまではゆかないにしても、揚州の学者はなにがしかみな詩人である。程晉芳（一七一八―一七八四）のように、親しくこれらの詩人の門に游んだ学者も少なくなく、揚州の漢学がはでな学問と評されるのは文学の色彩がとりわけ濃厚なためである。もっとも漢学を奉ずる学者たちには、詩の普及ないしは大衆化に対しては反感をいだく傾向も強かった。袁枚あたりはその矢面てに立たされた人である。

嘉慶も末から道光朝を通じて、揚州の学壇に活躍した人々には、天文暦算学の羅士琳（一七八四―一八五三）、公羊の学者で春秋繁露に注した凌曙（一七七五―一八二九）、文選の学の薛傳均（一七八八―一八二九）、詩には梅植之（一七九四―一八四三）、その梅植之から楚辞・文選の学を受けた李祖望（一八一四―一八八一）と薛壽（一八一二―一八七二）、また汪中の子の喜孫、焦循の子の廷琥らがある。この時期には、かねて阮元によって、揚州の地にゆかりある学としても提唱されていた文選の学が、少壮学徒に自覚されてようやく擡頭してくる。しかし梅植之師弟と交友の深かった儀徴の王翼鳳や劉文淇らも、咸豊三年（一八五三）、太平天国の乱に揚州城が壊滅したあと、相次いで非業の死を遂げ、揚州の学問文学ともに消え去ってしまう。わずかに燼餘をひろい、これを継いだ人として、李詳（興化の人、一八五九―一九三一）と古直（廣東梅県の人、一八八七―?）の名を忘れてはならないであろう。これをまた、かりに第三期としよう。

以上三期に分けて述べたところは、清代揚州の学問を考えるについて、はじめに一つの見とおしを立てようと試みたまでで、そのうちどの事象をとらえてみても、すべて別稿を草して詳述もしくは論証すべきことがらばかりである。その詳述の資料をすでにいくらか用意できているものもあれば、まだほとんどもたないものもある。その多くをもたないものについては、今後の調査の結果、あるいは右の見通しの一部を修正せねばならないこともあるかと思う。

梅植之に業を受けた薛壽の學詁齋文集巻上に「揚州十経師贊并序」なるものがある。揚州の学者十人を選んで、その一人一人に贊を書いたもので、その序にいう。

吾が郷里に経学の盛んなるは、隋唐以来、曹憲及び李氏父子、二徐兄弟、みな学に淵源あり、事を実にして是を求めき。わが朝の経術は往代をはるかにしのぎて、乾嘉以来、いよいよ盛んなれば、いま先賢の江都甘泉に籍ある人を録して、おのおの賛をつけ、景仰のよすがとはせん。（吾鄉經學之盛　隋唐以來　如曹憲及李氏父子　二徐兄弟皆學有淵源　實事求是　國朝經術　超邁往代　乾嘉以來　於斯爲盛　今摘錄先賢之籍隸江甘者　各系贊以志嚮往）

曹憲は隋に仕えて秘書学士となり、諸儒と桂苑珠叢を撰した。小学に詳しく、文選を子弟に授け、その音は当時に重んぜられ、またその傳雅音は王念孫が校定している。李氏父子とは李善とその子邕、字は泰和であろう。父の善の文選注を補い、玄宗のとき北海太守となったから李北海とよばれた人である。二徐兄弟とは宋の徐鉉徐鍇の兄弟、いわゆる大徐・小徐である。この序はかように揚州の地に小学と選学のゆかりがあることを述べて、乾嘉以来の学術はその伝統の上に開花したものとする。そして数える十経師の名は、汪中（容甫）・張宗泰（登封）・江藩（鄭堂）・鍾褒（葆岐）焦循（里堂）・李鍾泗（濱石）・黄承吉（春谷）・徐復（心仲）・凌曙（曉樓）・薛傳均（子韻）である。筆頭に措かれた汪中に与えられている贊には

文學之盛　廣陵之城　篤生汪氏　示人典程　口敝百代　心契七經　述學四卷　鉤玄索冥
左氏述義　著錄未成　經義知新　亦博亦精　儒林文苑　兼有令名　斯文領袖　權輿先生

とある。ここにはこの贊の句々について釈することは省く。ただ「儒林文苑、兼ねて令名あり」の句の意味するところは、本稿のはじめに当って詳述するところにより、おのずから明かにできるであろう。この贊を書いた薛壽はまた汪氏遺書後序をも書いている（學詁齋文集巻下）。およそ一千数百言におよぶ駢散文であるが、その中にも

鄉邦文獻　上繼徐鉉李善而無慚

國史品評　庶兼文苑儒林而不愧

とみえるのは、汪中の学問の、経学と文学とを兼載する性格を指摘するものであるとともに、先きの十経師贊の序にいうところと相俟って、遠く唐時代まで遡りうる揚州の地の学問の伝統の中にそれを位置づけようとしていることがわかる。なおかように駢散文で遺書の序を書いたり、土地の十経師を選んで贊を書いたりする、そのこと自体がまたいかにも揚州の学問であることを思わせる。なぜなら、実はそこにはなにがしかの学術史が、文学史が語られているからである。揚州学術史の資料としては、著者自身がそれを意識して書いたともいえる江藩の漢学師承記巻七を忘れてはならないが、これは列伝体をとりながら、またはなはだ文学の主張の色が濃厚である。[*4] その点、次に述べる譚獻の表などは、むしろ古く漢書の古今人表のきらいがないではないが、なかなかに識見を認めてよいと思われる点がある。

清朝も末に仁和（浙江省）の譚獻（一八三〇―一九〇一）は復堂日記六巻を残した。復堂類集之四として刊行されたが、その巻一に師儒表というものがある。題下に自ら注して「一時之見、未爲論定、錄存日記備忘」とことわってもいるとおり、いかにもみずからの備忘のための表にすぎないであろうが、時期としては清一代の学問が完全に結実したとき、そして広般な読書の所産である。まず表全体を見通すと、絶学一・名家二・大儒三・通儒四・舊学五・経師六・文儒七・校讐名家八・輿地名家九・小学名家十・提唱学者十一から成る。ここにその表すべてを挙げることはひかえる。ただ揚州漢学についてもっとも注目すべきは、この表の「絶学」の類である。従って表中、一の絶学のみ、そのままここに掲げてみよう。

絶學一

莊方耕先生學家　從子葆琛先生　孫綬甲卿珊

（葆琛二甥）劉申受先生

宋于庭先生

汪容甫先生（家學）子喜孫孟慈

（同學）劉端臨氏

李孝臣氏

賈稻孫氏

江鄭堂氏

章實齋先生

（同學）邵二雲先生

龔定庵先生

（同學）魏默深氏

（別出）黄春谷氏

（同學）焦里堂氏（家學）子廷琥虎玉

（春谷詩傳）王翼鳳句生

梅植之蘊生

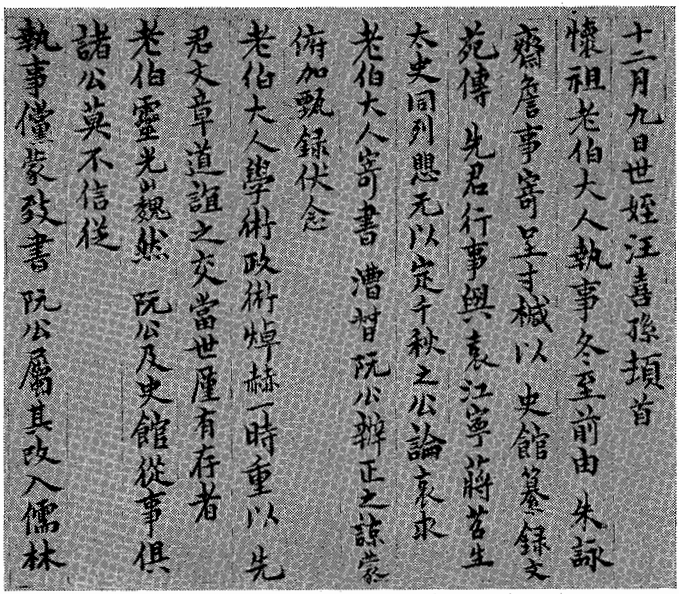
この表を見ると、莊存與にはじまり劉逢祿・宋翔鳳に至るのはいわゆる常州学派、それに汪中をかしらとする揚州学

派が並び、次いで章學誠と龔自珍とが独立して立てられたあとに、「別出」として黄承吉をかかげて焦循はこれの「同学」としている。黄承吉が清詩の歴史の上に意味深い存在であることは、これに「春谷傳詩」として王翼鳳と植梅之を附すことによって語られている。わたくしがさきに揚州の学者として述べた人々に対して、譚獻は絶学の名を与えた。高郵の王氏父子は錢大昕・惠棟らとともに第二表「名家」に在り、儀徵の阮氏は朱筠と併せて第十一表「提倡學者」を成す。ここにみえるのは〝江都甘泉に籍ある人〟すなわち純乎たる揚州の学者ばかりになっている。では絶学とはどういう学問をいうのか。それはその学問のできる人が容易には得られない、一種独特な風格をもつ学問を意味するもののようである。すでに揚州の学者たちの会話の中にもそのことばはみえている。[*6] まことに揚州の学問、いわゆる揚州漢学は、絶学の名を与えられるにふさわしいであろう。それだけに揚州漢学の発展を跡づけるとともに、その性格を究明しておくことは、清代学術史、文学史を考えるに際して、もっとも重要な作業の一つであるといえよう。

ここにはその手はじめとして、汪中をとりあげてみたい。揚州漢学の一つの典型ともいえる人物と考えるからであるが、かりに右に述べた譚獻の師儒表、薛壽の十経師贊についてみてもそれは首肯されるであろう。

汪中なる人物を知るについて、やはり江藩の漢学師承記はすぐれた資料の一つである。碑誌伝状としては、劉台拱（一七五一―一八〇五）の汪君伝（劉端臨文集巻一）・王昶（一七二四―一八〇七）の汪容甫墓碣（春融堂集巻五十九）・凌廷堪（一七五五―一八〇九）の汪容甫墓誌銘（校禮堂文集巻三十五）・孫星衍（一七五三―一八一八）の汪中伝（五松園文稿巻一）・王引之（一七六六―一八三四）の汪容甫先生行状（王文簡公文集巻四）・陳壽祺（一七七一―一八三四）の清故拔貢生汪先生墓志銘（左海文集巻九）があり、その他、洪亮吉（一七四六―一八〇九）の又書三友人遺事（更生齋文甲集巻四）をはじめとする逸聞の類、また淮海英靈集の小伝、湖海詩伝の蒲褐山房詩話などもあり、とくに子の喜孫が鋭意蒐集した資料は挙げて江都汪氏叢書に収められている。稲葉誠一氏の汪中伝稿（東方學第九輯）は精確に集成された年譜といえる。ここには以上主要な資料を挙げるにとどめて、汪中については略伝をも語ることは省く。むしろ問題提起の一つの方法とし

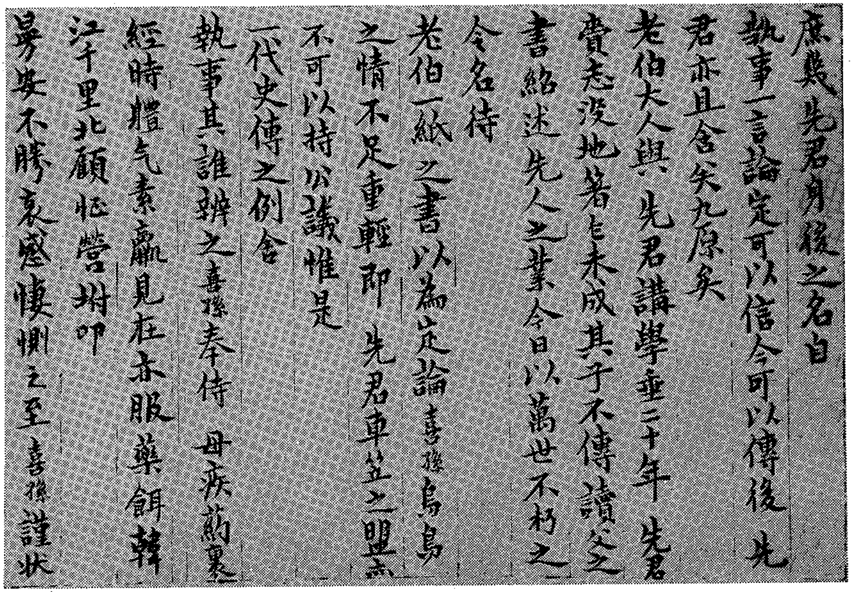
て、国史館において儒林伝から汪中の伝が外されたことがあるという、まだあまり人に知られていない事実について、まずその事の経緯に探究の興味を向けるとともに、そのことがらが揚州漢学の歴史とその性格のうえにおいてもつ意味について考えてみたいと思う。


十二月九日世姪汪喜孫頓首
懷祖老伯大人執事冬至前由朱詠
齋詹事寄呈寸楮以史館纂録文
苑傳先君行事與袁江寧蔣苕生
太史同列懇无以定千秋之公論哀求
老伯大人寄書漕督阮公辨正之諒蒙
俯加甄録伏念
老伯大人學術政術煒赫一時重以先
君文章道誼之交當世屈有存者
老伯靈光巍然阮公及史館從事俱
諸公莫不信從
執事儻蒙致書阮公屬其改入儒林

二

嘉慶二十五年（一八二〇）も冬至に近いある日、母の病いにかしづいて郷里の揚州にいた汪喜孫のもとへ、都にいる友人の朱士彦（詠齋）から一通のてがみが届いた。彼の父、汪中が世を去ってすでに二十五年、てがみを開いて愕然とした汪喜孫は、さきごろまで都にいて教えを受けた先生であり、また父の親友でもあった王念孫（懐祖）に、いそいで懇願のてがみを差し出すべく筆を執った。上にその書簡を景照し、下にその全文を訳出しよう。

十二月九日、世姪[*7]王喜孫、頓首して
懐祖先生[*8]に申し上げます。冬至まえ、朱詠齋詹事[*9]よりてがみが来て知らせてまいりましたところでは、国史館に於いては文苑伝を纂録されており、亡父の事跡は、袁江寧[*10]・蒋苕生太史[*11]らと同列に置かれた模様、これで千載の公論を定められはしないか心配でなりません。


庶幾 先君身後之名自
執事一言論定可以信今可以傳後 先
君亦且含笑九原矣
先伯大人與 先君講學垂二十年 先君
賫志没地著セ未成其子不傳讀父之
書紹述先人之業今日以萬世不朽之
令名待
老伯一紙之書以為定論 喜孫 烏鳥
之情不足重輕即 先君車笠之盟亦
不可以持公議惟是
一代史傳之例含
執事其誰辨之 喜孫 奉侍 母疾 葯裹
經時體气素羸見在亦服薬餌 韓
江千里北顧怔營 竚叩
毋任不勝哀感慄惻之至 喜孫 謹状

先生にお願いいたします。どうか、漕督の阮公におてがみを書いてくださいまして、これを辨正し、なんとか吟味しなおしていただけますよう御配慮を賜りたく存じます。

先生の、学者として、また政治家としての力量は当代に知れわたっていますうえに、亡父が文章と道義の交りをいただいたかたで当今ただおひとりの存命者でいられます。

先生は、魯の霊光殿さながらに巍然としておられ、[*12] 阮公も史館で編纂に当っている人々も、誰とて心服していない人はありません。

先生から、おてがみを阮公に寄せ、改めて儒林伝に入れるよう頼んでいただけますならば、亡父の死後の名は

先生の一言によって論定され、今日の定論となり、後世に伝えられることとなりましょうから、亡父もさぞや九泉にて笑みをうかべることでございましょう。

先生が亡父と学問を研究なさいましたのは、二十年に垂んといたします。父は志をとげえずして没し、

著作も未完成ですし、その子は父の書を読まず父の業をついでおりません。今日では万世不朽の令名が先生の一封のおてがみによって定論としていただけるのを期待しています。わたくしの嘆息などはまるで顧みてもらえませんし、たとえ亡父の気のあった友だちがおりましても、とても公議を正すことなどできません。まったく

わが朝の史伝の体例こそは

先生を舎いて他に誰が辯じえましょう。わたくしは母の病に侍し、薬物に埋れて過しますうちに、もともと弱い体質のこととて、いまではわたくしも薬を服しております。揚州の地からはるか北を望んで気もおちつきません。

御多幸を祈り上げます。哀感の迫るに堪えきれずして、謹んで筆を執りました。喜孫　拝。

このてがみは民国七年（一九一八）に上虞の羅氏（羅振玉）が、北京の王氏宅（高郵の王念孫・王引之父子の京邸）に残っていた十二家二十六通の書簡を影印して、昭代経師手簡初篇と題して世に出した書物にみえる。つまりそれまでは人の目に触れることはなかった資料である。[*13] 汪喜孫は父の著述はもとより、およそ父に関する資料のすべてを実に丹念に集めた人で、その成果は江都汪氏叢書として家刻し、いまではその景印本もある。汪中が亡くなったとき喜孫はわずかに九歳であった。阮元は「その家に出むいて遺書を求めたが、一片の紙きれさえも得られなかった」という（淮海英靈集巻四汪中小伝）。それを思えば生涯不遇をかこつ汪中も、よい子に恵まれたと言ってよい。ところでその江都汪氏叢書に汪喜孫は自ら輯した汪氏学行記六巻を収める。その巻第三にさりげなく記録されている一通の書簡に注意しなければならない。

聞　　聞くところによれば御尊父はすでに儒林伝に入
尊　大　人　已　入　儒　林　傳　不　獨　　られました由です。ただに御尊父の名を不朽に

尊大人之名垂不朽所以鼓舞後進者其益無疆也

垂れるのみならず、後進を鼓舞することとなり、その益はかぎりないものと存じます。

これは明らかに、喜孫の懇願をうけた王念孫からの返書である。つまり汪喜孫は、王念孫から父がすでに儒林伝に収められていることを知らされたてがみはこうして記録しているのであるが、なぜかようなてがみをもらったのかは語りたがらない。喜孫の集は汪孟慈文集[*14]といい、その稿本は遼雅齋叢書に景印されたが、この懇願のてがみなど録すべくもない。汪喜孫にしてみれば、後世、高郵王氏の京邸からかの十二月九日付け手簡が出て公表されることになろうとは予想しなかったであろう。ところでその十二月九日が何年のことであるかについて実は疑念がある。またこのてがみの文面について見るかぎり、汪中の伝ははじめから儒林伝に入れられず、文苑伝の纂集に際してはじめて採録されたかにみえる。そこで、はじめにその年を嘉慶二十五年と推定した理由から述べよう。

汪喜孫の自訂年譜稿本、嘉慶十九年（一八一四）の条には、

嘉慶十九年甲戌二十九歳　阮撫部爲先君作儒林傳
余計偕過淮安漕督署往謝之　阮公以南碑北帖論見
示　其實王右軍北宗非南派也

とみえ、彼は阮元が彼の父のために儒林伝を撰したというので、会試に赴く途次、淮安の漕督署に阮元を訪ねて、謝意を表している。そのことをそのとき阮元から新作の論文「南碑北帖論」を示された思い出をも含めて記すのであるが、これは一体、彼の懇願にもとづく王念孫の口添えがあって、はじめて伝が立てられたのに対しての謝意なのであろうか。

喜孫手簡にいう「漕督の阮公」とは、もとより阮元である。阮元は嘉慶十五年（一八一〇）に自ら願い出て国史館総輯を兼任して、国史儒林伝の編纂に当り、十七年に進呈している。そして同年八月に漕運総督として都を離れ、二十二年に両広総督として広州に赴任するまでは、〝漕督〟としてその駐在地である淮安（江蘇省）にいた。従って「漕

督の阮公」とよぶのをこの任期に固く結ぶならば、このてがみは嘉慶十七年以後二十一年（一八一六）暮れまでの間となる。ところがいまこのてがみを書く動機となった書簡を寄せた朱士彦のことを「朱詠齋詹事」とよんでいる。朱士彦が詹事府少詹事となったのは嘉慶二十四年（一八一九）である。してみると阮元を漕督とよんだのは不用意もしくは慣習にもとづくとはできても、朱士彦を詹事とよんだことは無視できない。そのうえ嘉慶二十年ころから喜孫はめだって王念孫と交渉が多い。王念孫が述学の序を書いたのはこの年正月七日である。二十二年に段氏説文注を喜孫に贈り「これは宝剣を烈士に贈るに等しい」と言ったという（孟慈自訂年譜稿本）[*15]。このころ汪喜孫はいくたびも礼部の試（会試）に応じて都にいたから、王念孫の門に親しく出入りしたのである。するとかえって、懇願をするのにてがみを用いる必要はないことになる。しかし問題のてがみは揚州から出していることは「邗江千里」の句でも明らかである。早歳、郷試に挙げられたにもかかわらず、八度も礼部の試に赴いてみな及第しなかった汪喜孫は、しばしば南北の間を往来してはいるが、嘉慶二十五年七月、仁宗が崩じると、喜孫は母を伴い十三日の行程で揚州へ帰っている。因ってこころみにこの在郷中の時に擬定してみたものである。もっとも、すぐまた道光元年には母とともに都入りをしているが[*16]。

阮元の儒林伝稿はいま道光中（一八二一—五〇）甘泉の黄爽が輯した巾箱本の知足齋叢書に四巻が収められている。のち光緒十一年（一八八五）に儀徴の張氏が榕園叢書に重刊している。その巻第四に任大椿の伝が立てられ、これに附伝として李惇・劉台拱・汪中の三人がみえる。任大椿についての記述の終ったあと、

時江北學者　李惇劉台拱汪中　皆繼起（汪中述學）

といって李・劉二氏を記し、つづいて

汪中字容甫　江都拔貢生　好古博學　長於經誼（王昶春融堂集）　於詩古文書

翰無所文工　著周官徵文　左氏春秋釋義　皆依據經證　箴砭俗學

孫星衍汪中傳又撰述學内外篇府志

という集伝体の記述がみえる。阮元は集傳という編纂方法による以上、汪中について「好古博學、經誼に長じ、詩古文書翰に於いて、工ならざる所無し」というにしても「俗学を箴砭す」というにしても、自然それは王昶や孫星衍のことばそのままではあるが、阮元がその語を集句したこと自体に、汪中の学問文学に対する阮元の評価が一層鋭くこめられているのである。[*17]

一体、阮元はどの程度まで汪中なる人物を知り、どのように評価していたか、それを考えるに足る資料は必ずしも乏しくはない。阮元の随筆集である廣陵詩事（刊本）、定香亭筆談（刊本）・琅環僊館書叙錄（汪氏學行記に引く）など参観するに足るが、いまは淮海英靈集の小伝を見よう。阮元は、汪中が史学に精しかったこと、自ら春秋の学に深いと言っていたことを記し、やや問題の多いその人柄について「とかく人をからかったり人と争ったりするのが欠点とされているが、しかし銭大昕・段玉裁・王念孫・程瑤田をいつも口を極めて推崇していたし、また顧炎武・胡渭・梅文鼎・閻若璩・惠棟・戴震のためには六君子頌[*18]を作ったこともある。これによっても、謙遜で善をこのむ人柄であったことがわかる」と弁護している。汪中と同郡のよしみをもち、またかようにその学行に対して少なくとも冷静な批判のできた阮元が、果して汪喜孫の懇願にもとづく王念孫の慫慂を俟って、任大椿附伝のかたちにもせよ、今日の儒林伝稿にみるように、はじめて汪中の伝を付したのであろうか。

いま阮元の揅經室續集巻二に擬儒林伝稿凡例、ならびに集伝錄存がある。後者のあとに嗣子常生が案語を付して次のようにいう。

父はむかし儒林伝一百數十人を撰した。それは諸文献を集成してつくる方法であった。いまにも完成というときに、漕運総督となって急にみやこを離れた。その後、史館では父の残した稿を底稿とはしたが、數篇を除いたし、また除きはしなかった人の伝でも文中の字句には刪ったものもある。それにしても除いた伝は、みなもう儒林伝

と定められ史館の文とされているのであるから、私家の集に刊入できない。その点、とり除いた伝は、たちまち史館の文ではなくなっているから、儒林という名はとり去って私家の集に収めても差支えはないはずである。そういうわけでいま旧稿をとり出して一篇にまとめ、揅經室續集に収録する。

してみると、ここに収録されている十六篇、凡そ二十余人の伝は、みな阮元が翰林を去ったあとで史館の裁量を以て刪り去られたものと分かる。いまその目を作りここに掲げる。

毛奇齡　陸邦烈　沈國模　史孝咸　邵曾可　韓孔當　勞史　桑調元　汪鑒　談泰　桂馥
錢澄之　方中通　弟中履　朱鶴齡　臧庸　閻循觀　汪紱　金榜　王鳴盛　丁杰
任大椿　李惇　劉台拱　汪中　孔廣森　張惠言　孔興燮　孔繼涵　顏光猷

ここに刪り去られた十六篇の一つとしてではあるが、任大椿の附伝として汪中が見えることは、かえって阮元が史館に在るときすでに汪中を儒林伝に収めていた確実な証拠となる。朱士彥が汪喜孫に報せた消息は決して虚報ではなかったし、それは儒林から外されて文苑にまわされることになっていると知っての報せであったのであろう。またそれは阮元の汪中の学問に対する品藻にはなんのかかわりもなく、阮元その人の全く関知せぬことであったことを知るのである。従って汪喜孫が淮安漕督署を訪れての謝意は、史館に在っての阮元の、父の学問に対する認識に対してであって、後日のできごとはまだ知る由もなくてにちがいない。

今日みられる儒林伝稿（前述、知足齋叢書本・榕園叢書本）[*19]には、ひとたびは確かに刪り去られた十六篇のことごとくが収録されており、そのうち汪中伝の文は先に記したとおりである。なお国史館では、纂修に与る臣がそれぞれに分纂するので、同一人の伝が各種残されることもあったらしい。汪氏学行記巻三に喜孫は「擬儒林傳稿」として、阮元が汪中のために撰した伝のほかに、朱珔（蘭坡）の撰した伝と錢林（叔雅）の撰した伝を収めている。

朱珔のは

汪中字容甫　拔貢生　治左氏春秋　識議超卓　爲唐以下所未有
撰述學内外篇　經術詞術　幷臻絶誼　事母以孝聞　卒年五十一

錢林のは

汪中字容甫　江都人　乾隆四十二年選拔貢生　少時爲經世之學
求合世用　中年專治經史　實事求是　不尚墨守　著爲文詞　博大
淹通　凌轢一時　爲江淮學者冠　尤深于春秋左氏　著春秋述義
又撰述學内外篇　識議超卓　成一家言　卒年五十一

である。ところでこれらはみな、民国十六年に張爾巽を館長とする清史館が完成した「清史稿」の儒林伝にみる汪中伝とははなはだ異る。清史稿儒林伝二に、汪中は江徳量・徐復・汪光爔を附伝として、かえって独立した伝を立てられ、学説の紹介をも含んでおよそ一千余言、それに先立つ王念孫の伝に匹敵する扱いをうけている。これら事象の分析とその経緯の調査は別稿にゆずらねばならない。[*20] ここにはむしろ王喜孫の「尚友記」に関する疑念を述べておこう。

邃雅齋叢書には「尚友記稿本」不分巻を収めるし、またその汪孟慈文集稿本に、尚友記自叙がみられる。この自叙によると、

昔阮相公撰儒林傳　未成遷漕運總督　以其稾囑喜荀　藏之名山
喜荀因補其缺　爲家傳若干篇　所以備史臣采錄也　未爲史官
不敢作傳　名之曰尚友記

とまずいうのであるが、嘉慶十七年八月、漕督として史館を離れるに際して、阮元は儒林伝稿を〝進呈〟している。それは雷塘庵主弟子記その他に徴するまでもなく当然であろう。それに当時、喜孫（のち喜荀と改名）は二十七歳の挙人にすぎない。「その稿を以て喜荀に嘱し、之を名山に蔵せしむ」というようなことがありうるであろうか。その稿

とは彼の父、汪中の稿だけをいうともうけとれない。「因ってその欽を補ひ」とは、彼が阮元の伝にあるべくして伝のないと思う人について、自ら伝を撰したことを言うのであろうから。しかもそのうえ「かといって自分は史官ではないから、〃伝〃というのははばかりがあろう。〃尚友記〃と命名しておく」といっている。さらにこれにつづいて、

潘少司馬錫恩爲丁卯同年生撰文苑循吏傳未成調河道錢學士林爲壬午薦主撰儒林文苑傳亦未成臨終以手藁付喜荀因屬其門人王按察使璨授梓復補二公之闕附尚友記

という。するとさらに潘錫恩[*21]と錢林の稿を得て、そこにあるべくしていずれにもない人々を補ってつけ加え、彼の尚友記は〃史臣の採録〃を待っている、とみてよい。錢林は道光八年に没した（一七六二―一八二八　汪喜孫撰伝）から、この記事はそれ以後のものであり、臨終に喜荀に手渡したという稿は「紀事底藁」と称し、十冊に綴じられていた。門人王藻（菽原）の努力によって「文獻徵存錄」（十巻　咸豐八年通州王氏有嘉樹軒刊本）として今日見られるものがこれである。喜孫の「王按察使璨」と記すのが明らかに王藻のことである。[*22]王藻の奔走にもかかわらず、喜孫は師の錢林の稿を吝んで、なしくずしにしか渡さなかったらしい。文獻徵存錄の序に王藻がことの次第を詳しく書いているところから、かえってこの錢林の稿が汪喜孫のもとにあったということには信がおける。

ついでながらこの尚友記自叙の中で、いまひとつ喜孫の人がらをうかがうに足ると思うことがある。それは、この序の中に「吾歙汪雙池　江愼修　吾楊朱士泉　王白田　無漢宋門戸之見　實事求是　躬行實踐　蔚爲大儒」の文があり、王白田、すなわち朱子年譜を作った王懋竑（實應の人）を、汪烜・江永・朱澤澐と並べて〃大儒〃と頌している。ところが、これより二十余年前ではあるが、彼が江藩の漢学師承記に跋を書いたとき[*23]（嘉慶十七年　一八一二）には、「王白田根據漢宋　比諸春秋之調人　惡莠亂苗　似是而非　自非大儒　孰有能辨之者」といっている。二十年の歳月が彼自身において漢宋門戸の見を捨てさせたのであろうか。それとも、勢いの然らしむるところ〃苗を乱す莠〃として悪

むべしとしたその人をも、郷里の儒林に列しては大儒とあがめるのであろうか。それはともあれ、いまは尚友記稿本について、家伝を作られている人を調べてみよう。

鄭虎文（試齋　秀水の人）　趙懷玉（味辛　武進の人）　焦循（里堂　甘泉の人）　丁杰（升衢　歸安の人）　臧禮堂（庸の弟　武進の人）　孫星衍（淵如　陽湖の人）　程晉芳（魚門　蕺園　江都の人）　劉台拱（端臨　寶應の人）　李惇（成裕　高郵の人）　任大椿（幼植　興化の人）　盧文弨（紹弓　杭州の人）　汪萊（孝嬰　歙人）　李因篤（孔德　山西洪洞の人）　馮廷丞（均弼　代州の人）

の十四人である。人数も僅かなれば顔ぶれもまた雑然として、いかにも〝闕けたるを補ったもの〟しかもその一部かと思える。ここで疑問と思うのは、劉台拱・李惇・任大椿の名がみえることである。これらはすでに述べたように阮常生の集伝録存にみえる人で、かえって阮元の稿に確かにあったとわかる人たちである。喜孫が見たのがもし削り去られたあとの稿本であったのなら、彼の父の伝もないことを、朱士彦からの来翰をまつまでもなく知ったはずではないか。阮元が「漕運總督に遷るとき、其の藁を以て喜荀に囑し」たなどということが、ここに至って一層疑わしくなってくる。

中国の正史に儒林列伝を見るのは、すでに太史公司馬遷の書以来であるが、文苑伝は范氏の後漢書に至ってはじめて立てられた。爾来この両伝は中国の正史の上に分合有無の幾変遷を遂げて来た。その分合有無はひとえにその時代の学問の性格がおのずから馴致した結果とみるべきで、宋史における道学伝の出現などその証である。清朝の学問に対しては、その性格から考えてみても儒林・文苑の両伝が並び立てられることとなるのは当然であろう。ところできの汪喜孫手簡は、この両伝に軒輊をみとめる観念を基調としているとみてよいであろう。それは果して当時における通念であったろうか。

国史館における作業は、交代した新王朝で勝朝の正史を編纂しようというばあいとは異り、その時代の学者たちの碑誌伝状を採って史料をととのえてゆくのであるから、その父その師その友にやがて史館の断が下され、まさに〝千秋の定論〟となることでもあり、天下の学者の関心が史館に集るのは自然である。それだけに史館とてもその編纂については、史館独自の裁量にのみよることなく、広く江湖の学者の意見を徴したようである。そのころ焦循が汪喜孫に与えたてがみの中に、

昨年、史館では儒林文苑の両伝に、いかなる人物を入れるべきやとのおたずねがありましたので、尊公（喜孫の父、汪中）の名を挙げ、儒林伝に入れられるべく申しおきましたが、採択せられたかどうかは存じません。とは申せこれは公論ではございますが。（汪氏學行記巻三所収）

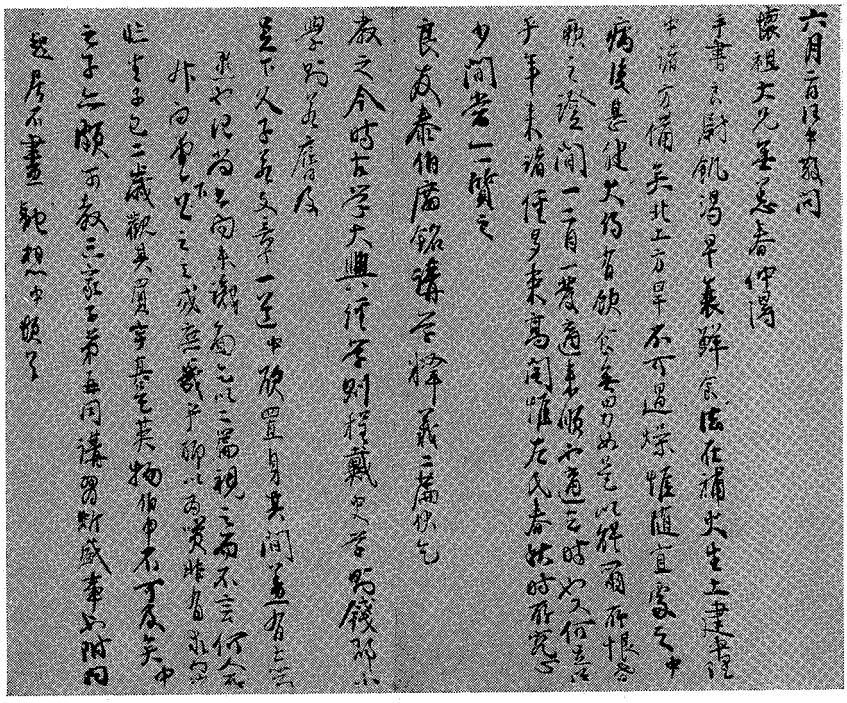
と言っているのに見ても、その間の事情がうかがえる。もっともこの筆使いからすると、これは汪喜孫からの質疑に答えた返書なのであろう。焦循は別に汪中だけを史館に答申したのではなかった。雕菰樓集巻十二に、国史儒林文苑伝議なる文があって、焦循は〝芻蕘に詢はるるに備ふ〟とて、編纂について七則を呈言している。その第四則を「鑒別」と題して「儒林文苑両伝が分けてたてられたからには、そのおのおのに属す人々が誤り混じてはならない」とし「経学者だからといって辞賦を習わないわけではなく、文学者だからといっても経書の訓詁はわきまえていよう。その軽重をはかって考えるがよろしかろう」と注意し、その例として「黄宗羲・毛奇齢・全祖望は詩文に富んではいるが、学問が文学よりも先きだっている。朱彝尊・姜宸英・汪琬は経学の業績がなくはないが、文学が学問よりすぐれている」といい、つづいて、儒林に入れることにまず異論のない人々として、専門に分けて二十余家を挙げる。「推歩（天文暦算）の王錫闡・梅文鼎・陳厚耀。音学（音韻學）の顧炎武。律呂（音楽理論）の王蘭生。易の胡煦・惠棟。春秋の萬斯大・顧棟高。禹貢の胡渭。尚書の閻若璩。儀礼の張爾岐。爾雅の邵晉涵。朱子を服膺する王懋竑。明史を論定した萬斯同。諸書を校輯した方苞・齊召南・周永年・陸錫熊。声音訓詁、名物象数の江永・戴震・錢塘」である。

専門ごとに注記して、ほかにまだ人があることをつねに注意しているが、そのうち名物象数の学に注して「近時、程瑤田の通藝錄のごとき、また揚州の任大椿・李惇・劉台拱・顧九苞ら、みなこの学を為す」という。

焦循の〝鑒別〟はまだつづく。「同じく校讎家でも、何焯は文苑に入れるがよろしく―明の茅艮らの一派であるから―、盧文弨は儒林に置くのがよろしい―唐の陸徳明らに比しうるゆえ―。同じく博物の人でも、銭大昕は儒林に入れ―なぜならその博さは学問における博さだから―、袁枚は文苑に置くのがよい―なぜならその博さが文における博さだから―」とその帰属を弁別する。そしてかように考えてゆくと、「馬驌・沈彤・陳祖範・應撝謙・孔廣森・朱筠金榜・武億・王鳴盛・江聲・任大椿・張惠言・汪中は、みな儒林の選なり。魏禧・尤侗・施閏章・田雯・周亮工・吳梅村・陳維崧・吳綺・汪懋麟・馮景・杭世駿は、みな文苑の雄なり」といい、そのいずれにも、ただ自分が知っている人々を挙げただけで、これだけだというのではなく、他にまだ多いことをことわっている。そのことわりはいかにも適切であって、これらはすべて例示したものとして見るべきであるが、その議論はおおむね持平の論であり、彼みずからも公論と考えるところを述べたつもりであろう。

とはいえ、もし個々の点をとらえて検討を加えるならばもとより多くの問題が浮び上ってくるにちがいない。ここで帰属を分かったためではあるが、銭大昕と袁枚とを博物の士として並べてとり出している点に注意しよう。銭袁二氏は詩の友であって、詩風も相近いものがあるとわたくしは考える。[*24] しかし広い意味での学問の性格はたしかに両者、はなはだ異る。この対比にはあるいは焦循らしい新鮮な感覚を認めるべきであるかもしれない。焦循も揚州の人であるが、揚州の漢学を奉ずる人たち、というか少なくとも汪中その人には、袁枚の風格をけぎらいする傾向が認められる。汪中など「時の人には軽ろがろしく許さず、世に盛名をうたわれている人は、必ず思うままに譏った。なかにそれを誡める人があると『わたくしが罵る人みなが、古今を辨えぬ人ではないが、莠が苗を乱すの恐れるにほかならない。方苞や袁枚のやからは、なにもわざわざ罵るまでもなかろうが』といった」とは、甘泉の江藩が漢学師承記（巻

七）に記すところである。焦循はその方苞をも、校輯家として儒林に薦めている。いっぽう汪中の家刻小字本述学内篇を見ると「婦人無主問答」のあとに「方望侍郎家廟不爲婦人作主以爲禮也」と記して批判を加え「其爲不學　又不足言矣」と結ぶなどは、随分ひどい罵りかたである。さすがこの句はほかの刊本では削り去られて「中謹据禮正之如此」に代えられているが[*25]、それは喜孫の配慮によるものかもしれない。しかしその喜孫も、さきの王念孫に出した懇願のてがみで「亡父の事跡が袁江寧や蔣茗生太史らと同列に置かれて、千載の公論を定められはしないか心配でならない」とまでいう。袁江寧とは袁枚である。江寧の知県であったことがあるからそうよんだのであるが、号の隨園で知られる。またこの蔣茗生太史とは蔣士銓である。汪中は恐らく日頃、軽侮していたであろう。洪亮吉の書いた書三友人遺事（更生齋文甲集巻四）によると、汪中が揚州の安定書院に学んでいたとき（それは十六七で博士弟子に補されてのち二十歳で県学の附生となるまでの間のことであろうが）、院長が更迭するごとに汪中は経史の書をたばさんで会いにゆき、数か処の質問をする。そのなかに答えられないところがあると、大笑いをして退出したという。その被害者として名の見えるのが沈志祖とこの蔣士銓である。沈志祖などそのときもう老年で、こんな目にあわされて数日後に亡くなったので、人々は汪中のためだといい、狂生とあだ名したという。この話を書き残した洪亮吉は汪中より三歳の年少で、陽湖の人。この遺事に記すところは、みな汪中の傍に在っての実見にもとづくもので、資料としての信憑度は最も高い。汪中のこうした性格をうけつぎ、少なくともその人物評価を習聞していた喜孫は、その感情をこの懇願のてがみにも思わず露呈したものと考えてよかろう。喜孫は汪中の晩年の子であることはその名の示すとおりであるが、乾隆五十一年、汪中四十一歳のときに生れて、わずか九歳にして父に死別している。しかし晩年その生活が物心両面とも比較的安定した汪中は、この子の薫育にかなりの力を注いだあとがあり、子は父の遺志を多く受け継いだにちがいない。ともあれ同じ揚州の学者でも、焦循の態度には、方苞・袁枚らに対して汪氏父子にみるような感情的な評価は認められず、ひいては儒林文苑両伝に対するうけとりかたも、はなはだ冷静であり、文苑伝に対する認識にみても、文



学に対する意識が汪喜孫あたりとはよほど異っていたことが認められる。[*26]

ところで国史館に対する答申の今日見うるものは、焦循のそれのみではない。臧庸なども阮元に書を送り、

先生は、近人では、張皋文（恵言）をすでに採録なさったと聞きますが、盧學士（文弨）・王光祿（鳴盛）・錢少詹事（大昕）・江叔澐（聲）・錢學原（錢學淵、錢塘のことか）・劉端臨（台拱）・凌次仲（廷堪）・汪容夫[*27]（中）の諸君をもう著録なさいましたでしょうか。

といっている。これは汪氏学行記巻三に、喜孫がこの部分のみを収録するところによったので、書簡の全容を知ることができない。

昭代経師手簡には、汪中が王念孫に送ったてがみ一通をも収め、これを冒頭に置いている。

はじめに

六月二日　汪中敬問

懷祖大兄無恙　春仲得
手書　良尉飢渇…

と記すのは、あとの文によって汪喜孫二歳の年とわかるので、乾隆五十二年（一七八七）の六月である。このてがみで汪中はその抱懐を語って次のとおりいう。

今時古學大興　經學則程戴　史學則錢邵　小學則若膺　及
足下父子　若文章一道　中欲置身其間　蓋有志不逮也

今時　古学大いに興りて　経学には則ち程〔瑤田〕戴〔震〕　史学には則ち錢〔大昕〕邵〔晉涵〕　小学には則ち若膺（段玉裁）及び足下父子（王念孫・王引之）　文章の一道の若きは　中　身を其の間に置かんと欲す　蓋し志有りて逮ばざるなり

してみると、彼みずから〝文章の道〟をもって当代一流の学者の列に加わろうと志している、というより、その列に互していると自負しているのである。その文章とはもとより学者の文章なのであるけれども、経学・史学・小学の人は儒林伝中の人であるが、文章の一道に生きた人こそ、文苑を飾るにもっともふさわしい人ではないか。

薛壽の汪中贊に「儒林文苑　兼ねて令名有り」の句があった。これこそ汪中の人とその学問をもっとも巧みに語ったものであった。かりにそれはその子汪喜孫の感覚をもってしては、所詮受けとりがたいものであるにもせよ、ここにこそ絶学とよばれる揚州漢学の姿が具現しているのであって、それは円熟した清朝漢学が誇るに足る令姿でなければならぬはずである。

注

1　近藤『阮元』（宇野哲人博士米寿祝賀紀念論集「中国の思想家」下）

2　阮元のこの記述は、汪中の書いた「大清故高郵州學生賈君銘」と「大清候選知県李君銘」（ともに「述學」外篇にみえる）とを資料とする。

3　皖南の礼学については、わたくしが以前に書いた「戴震の考工記図について」（東方学第十一輯）が、いくぶんかの論証となろう。

4　近藤「漢学師承の文章—清朝漢学のかたち—」（函館人文学会「人文論究」第十七号）

5　倉石武四郎先生「黄承吉とその学問」（昭和十八年「支那語文化」第一号）

6　たとえば、汪中は江藩に向って「自分は学問においてうかがわぬくまもないが、九章の術を明らかにすることができなかった。あなたは年若く体力も強いのにどうしてこの絶学をなさらぬか」といって、梅氏の書を贈ったという（漢学師承記巻七）。これは古算法を絶学とよんだものであるが、絶学とはやりてのえがたい学問をいう。

7　王念孫は父の友人であるから自分のことを世姪といった。

8　原文「老伯大人執事」とみえる「老伯」とは父の友人に対していうことば。

9　朱詠斎は名を士彦といい、字は修承。宝応の朱彬（武曹）の子。嘉慶七年（一八〇二）の進士で、翰林にいて国史館纂修に充てられ、手ずから河渠書を書きあげた。二十四年に詹事府少詹事となり、二十五年秋に内閣学士兼礼部侍郎、道光十七年に兵部尚書となり、十八年（一八三八）に没した（続碑伝集巻十季芝昌撰神道碑・清史列伝巻三十七大臣伝続編）。この朱士彦と汪喜孫との交友を知る資料は実は乏しい。しかしその父どおしの間には神父があった。

　父の朱彬は乾隆六十年（一七九五）の進士で、若いときから外兄に当る劉台拱、高郵の王氏父子・李惇、餘姚の邵晉涵、そして汪中らと切磋し、官についてのちも互にてがみを交して論難をつづけた（碑伝集補巻三十九朱為弼撰墓誌銘）。その著、経伝攷証八巻を見てもほとんどこの交友の所産を思わせるものがある。

10　袁枚。字は簡齋、浙江銭塘の人。乾隆四年（一七三九）の進士で、江寧県の知県となり、父の喪に遇ってからは江寧の小倉山に随園を築き、書を聚め詩古文を楽み、こうして五十年の生活を送り、再びは仕えなかった。漢学派の江藩あたりからは好まれない人であるが、程晉芳が死んで五千余の借財があったとき、袁枚は揚州に行ってその喪を営み借財を返してやったという。小倉山房詩文集ほか詩話尺牘などが残る。嘉慶二年（一七九七）八十二歳で亡くなった。

11　蔣士銓。字は心餘、苕生は別の字。太史とは翰林の官の俗称。江西鉛山の人で、乾隆三十二年（一七五七）の進士で編修を授けられた。その詩は気体雄傑と称せられ、袁枚・趙翼とならべて、袁蔣趙三家と称せられた。忠雅堂詩文集がある。乾隆四十九年（一七八四）六十歳で亡くなった。

12　朱彬がその著の礼記訓纂を都の王念孫に贈ったときのてがみ（昭代経師手簡第十六翰）にも「先生巍然一老如魯靈光」の句がみえる。この句は「壬辰癸巳の間（乾隆三十七・八年）汪中や李惇と交友しつつ先生をお慕い申してより、五十年後の今日、諸君の墓木はすでにひとかかえとなっていますが」につづく。このてがみは道光元年（一八二一）ころのてがみと分わかるので、時に王念孫は

七十八歳。もとより王延寿の「魯靈光殿賦序」の「自西京未央建章之殿、皆見隳壞、而靈光巋然獨存」をふまえる。

13 この意味からと、またこのてがみの訳読にはまだ問題の個所もあると思うのとから、とくに原形を示すべく景照した。いっぽう言葉の典故を示す注は加えなかった。

14 汪孟慈文集も稿本があるのみで、遼雅齋叢書が出るまでは見られない本であった。わたくしは藤塚鄰先生から御秘蔵の精抄本を学徒出陣の餞けとしていただいたが、留守中、家郷の戦災により、父の命とともに焼失した。

15 汪孟慈自訂年譜稿本にみえる。藤塚先生旧蔵、いま東京大学文学部中国哲学文学研究室に帰す。劉盼遂の高郵王氏父子年譜の嘉慶二十二年丁丑七十四歳（念孫）にもこのことを記し「見汪孟慈自撰年譜稿本今蔵日本某氏」と注するのがこの本。

16 自訂年譜はここで切れてしまう。しかしこのあとは、汪孟慈文集稿本末尾に附す子の保和の撰した行状によってみることができる。

17 近藤『阮元』（前記六九八頁）参照。

18 六儒頌ともよばれる。しかし萬斯同を加えた七君子頌であったかもしれない。別に精査した結果があるがここには略す。

19 儒林伝稿・文苑伝稿ともに単行する刊本が藤塚先生の秘笈にあったと記憶する。精査を許される機を得ないまま、いまはいずこに帰したかを知らぬ。

20 朱珔については続碑伝集巻十八の李元度撰伝、とくに小萬卷齋文稿について述べねばならない。銭林については碑伝集補巻八に汪喜孫撰の伝がある。また清史稿については繆荃孫の国史儒林文苑両伝始末（藝風堂文漫存巻三）などがある。本稿は汪中の儒林文苑両伝帰属問題に関する周辺にとどめる。

21 藩錫思は字を芸閣といい、涇県の人。嘉慶十六年の進士。道光六年に南河副総河、のち光禄卿となり、左副都御史、兵部吏部の侍郎を歴任して、二十三年に南河河道総督となる（続碑伝集巻三十三引安徽通志）。

22 王藻、字は戴陽、号は梅汴、江南呉江の人（鶴徴後録巻九・國朝詩人徴略巻二十七）は、雍正中の詩人で別人。銭林の弟子の王藻、字は菽原については碑伝がない。文献徴存録に冠する王藻の序は自筆の書体そのままに刊刻していて、その署名にも図記にも「王藻」とみえる。

23 この跋は漢学師承記には原刊本では經師經義目錄のあとに附されている。汪孟慈文集稿本に収めていないのは故意か遇然か。

24 近藤「銭大昕の文学」続（東京支那学会報第八号）

25 家蔵「述学」は内篇三巻外篇一巻のほかに、汪喜孫がはじめて補遺一巻別錄一巻をつけて（喜孫跋）計六巻として刊行した本で（江都汪氏叢書の述学はこの版本を収めている）、すでにこの罵言は削られている。なお家蔵本は封面に汪喜孫の墨跡があって、喜孫が朝鮮の金正喜に送った本であることがわかる。「先藻舉贈　秋史山泉鑑定　道光七年正月二十六日甘泉汪喜孫題記」とみえ、「汪喜孫印」「孟慈」「金正喜印」「金正喜氏考定之印」の図記がある。なお同時に贈られたものと思う「汪氏學行記」二冊もあるが王孟

慈と金阮堂に関する研究の深い藤塚博士の諸論考中に、これらの書物の存在について語られていないので、当時これがどこに蔵されていたものか不思議に思っている。

26　これは清朝の学者たちの文学に対する認識の歴史を考える一つの資料であると思うが、その方向への探求は別稿にゆずる。第十回東北中国学会で発表した「中国正統文学の崩壊—清朝考証学者における文学意識—」（要旨、集刊東洋学5）の問題につらなるものである。

27　汪中、字は容甫であるが、友人たちの記述にしばしば容夫と書いているのを見る。

＊＊　本稿は「三」汪中の文学「四」汪中の学問　を草することを予想し、「一」において揚州漢学の歴史を概観しつつ、揚州の学者の一典型として汪中をとりあげる意味を明らかにし、「二」を汪中論の序説とするものである。時間と紙幅の関係から「一」「二」にとどまったので、標題を表記のごとくした。

＊＊＊　本稿は昭和三十九年度文部省科学研究費による各個研究「清代揚州の文学の研究」の研究報告の一部とする。